

旅立ち

「雪国」の撮影が長引いて、小津安二郎監督が私のために書いてくれた「東京暮色」にも、今井正監督の「夜の鼓」にも出演できなかった。パリ行きを遅らせれば良か

私の履歴書

子 恵 岸

⑬

ったのに（一世一代の約束を変えなんて女が廢る）と思った。私が諦めた2つの役はにんじんくらぶの仲間、有馬稲子さんが演じてくれた。こうして1957年5月1日、私はパリの空港に着いた。エールフランス機のタラップを降りる私にフラッシュが焚

かれ、抱えきれないくらいスズランの花束が贈られた。私は24歳。夕映えの美しいスズラン祭りの日だった。

「忘れえぬ慕情」は劇場を観客が十重二十重に囲むほどの大ヒットとなった。フランスだけでなく欧州や中東など多くの国が歓迎してくれた。それまでの日本は19世紀の美術史に革命をもたらした浮世絵の世界であり、映画では

パリでフラッシュの出迎え

仲人探し難航 現れた川端先生

「雨月物語」の幽玄美、「羅生門」「七人の侍」などの傑作であったが、今の日本を描いたものはまだ少なかった。一般の人々にはフジヤマ、芸者、黄金の国ジパングがうつすら知識としてあっただけだったと思う。「忘れえぬ慕情」で私が演じた乃里子は長崎を襲った台風で死んだ。しかし廃墟となった町にすくくと立ち、明日に向かってたく

ましく生きる日本人の姿に観客は拍手したのだった。さて、パリに到着して3日後に迫った私たちの結婚式には日本と同じように仲人が必要だった。シアンピ家に集まる作家や文化人らの進言もあり、気後れを感じながらも、文化大使として評判が高かった某氏に仲人を依頼した。その方にはこやかにシアンピと談笑した後、私を見た顔

のソファに座っていたのは数日前、元結をパツンと切って決別した最後の映画「雪国」の原作者、川端康成先生だったからだ。湧きあがる幻想の中で私はボタン雪に埋もれ、あふれる涙で心が溶けた。私の旅行が許されなかった

昼時になり、シアンピ家の給仕長が銀皿から白アスパラガスを優雅に配った。私がフランスに着いて初めての昼食だった。ナイフを使っているかない物が3つあると聞いていた。サラダ菜、スパゲティ、アスパラガス……。じゃ、どうやって食べるの？



学生時代に書いた短編小説「梯子段」

川端先生は細い指で白アスパラガスをヒョイトつまみ、ペシヤメルソースに浸してパクリと食べた。すきだった。

「今、アスパラが旬ですね。とてもおいしい」と言いなが

ら私の眼をじっと見た。

「四谷の宿で座布団に隠した小説を見せてください」

「あれは……捨てました」

「嘘でしょう」

嘘だった。そんな私たちをシアンピが深い視線で見つめていた。
(女優)

当時、パリで開かれた国際ペンクラブ世界大会に出席するため、日本会長の川端先生が公式訪問されていたのだ。川端先生はそのままシアンピ家まで来てくださった。「仲人？ 私がやりますよ」と即座におっしゃった。

(女優)